

民族の団結呼号した矢先

北京五輪の成功を自画自賛した中国が、建国60周年に直面して「偉大な中国」を国内外に称揚しようとしていた矢先、中国奥地の新疆ウイグル自治区で大規模な反中国暴動が発生した。今回の暴動は、まさに起こるべくして起こった深刻な事件だといえよう。イタリヤでの主要国首脳会議への出席をキャンセルして急遽帰国した胡錦濤国家主席は、内政的には昨年3月のチベット騒乱に続いて起こった今回のウイグル族の反乱で、

対外的には中国はサミットに出る資格があるのかという疑念を抱かせたことによって、その面子を失ったと言わねばなるまい。民族の団結と統一を呼号していた矢先に、足元が大きく乱れ、揺らいだのであるから、胡錦濤主席にとってはサミットどころではなかったであろう。

新疆ウイグルでの抑圧と限界

大量移住やウイグル語・ウイグル文字消失の危機、「民族浄化」とも思われる一連の差別政策など、約800万ウイグル族の不満と反発はすでに沸騰点に達していた。もとより、新疆ウイグル自治区での民族対立の根は深く、世界史の裏面に隠されてきた積年の歴史的背景をもっている。

国際テロの一環と見なす

ここで読者のみなさんには、新疆の「疆」の字に着目していただきたい。左側は弓偏ではなく「弓」のなかに「土」がある。つまり弓を引いて獣を追いかける遊牧民の土地を意味している。その遊牧民の土地に農耕民である漢族(中国人)が入り込んで来て

「一」が示すように境界をしきり、「田」を作った「一」でしきり、さらに「田」を作った「一」つまり境界で囲んでしまっただけの「疆」なのである。したが

正論



学長 養正 国際事務局長 中嶋 嶺雄

って「疆」とは、境界で区画された土地を指し、新疆とは「新しく区画した土地」「新たに囲い込んだ土地」を意味している。

しかし、それはあくまでも漢字を使う漢民族の側からの意味づけであって、遊牧民のウイグル族からすれば、強制的に囲い込まれた土地や地域にはかならない。同様の表現はモンゴルの場合の「蒙疆」にも通じるのだが、新疆は西域とも言われたように、そこはもともシルクロードの通る自由な空間であった。ウイグル族には境

油や有色金属に関連する中ソ合併会社の問題、さらには1960、70年代の中ソ対立期の国境衝突、そして度重なる中国の核実験の場になるなど、ウイグル族はつねに犠牲を強いられてきた。

そうしたなかで中国当局は1958年に起こったウイグル族の反乱に対し「地方民族主義分子」とのレッテルを張りつけて以来、今日に至るまで独立運動や分離運動を徹底して抑圧する姿勢をとってきた。とくに米国を襲った「9・11」以後は、ブッシュ政権が後半、「反テロ運動を少数民族抑圧の手段にしてはならない」という立場を放棄して中国側に寄りそって以来、中国当局はきわめて強硬になり、ウイグル族の運動を国際的テロの一環としての「東突(東突厥)東トルキスタン」恐怖(テロ)と位置づけて、徹底抑圧の姿勢を示してきたのであった。

このような状況にもかかわらず、ウイグル族の反政府・反中国運動は連綿として続いてきた。トルコに亡命して1995年に94歳で死去した盲目のカリスマ的指導者アイサ・アルプテキンの東トル

キスタン党をはじめ、イスラム真主党、東トルキスタン・ウイグル聖戦組織、東トルキスタン・イスラム運動などさまざまな政党や地下組織が生まれ、この間、首都ウラムチ、第二の都市カシュガルなどでの反政府暴動や連続バス爆破事件などが起こっている。

2004年には、ワシントンD.C.に東トルキスタン亡命政府が発足、わが国も訪れたラビア・カーデル女史が総裁を務める世界ウイグル会議が国際的な統合組織として注目されている。

しかし今日の中国に見られる人民解放軍・武装警察部隊・公安警察という三重の暴力装置のもとでウイグル族の分離・独立運動の前途は厳しく険しいと言わざるを得ない。一方、今回の暴動で中国人が鎌や鋤を手に手にウイグル族を襲っている光景も伝えられたが、これなどは中国社会の内部に

今日まで潜在してきた村落間の武闘である「械闘」を思わせた。表面的な経済発展と軍事大国化にもかかわらず、中国の社会的成熟はまだまだ遠い将来のことではないのか。(なかじま みねお)